

# とある魔術の怠惰—怠 惰—

ウィキッド

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ここ学園都市は8割以上が学生が占める

そして、ここでは「超能力」と言う者が存在する

そんな科学の最先端の場所に僕はいる。『科学』と真反対の『魔術』を使える僕が。

裏組織に所属してたり、アレイスターのプランのズレを治したり、いろいろな日々を過ごしてるけど。結局はこれは

僕の、桐ヶ谷憂鬱きりがやゆううつの怠惰な日々である。

# 目次

プロローグ……	1
超電磁砲	8
お店にて	25



## プロローグ……

怠惰、という言葉をご存じだろうか

知らない人はやる気がない、鬱、ニートなどをイメージしてくればいい。

友人が言うにはどうやら僕“桐ヶ谷憂鬱”きりがやゆうつは怠惰な人間というやつらしい。

普通だったらなんてことない行動でも僕にはとてもめんどくさく感じる。

食べるのがめんどくさい。友達と遊ぶのもめんどくさい。動くのがめんどくさい。

まあ確かに怠惰という言葉が適切なのかもしれぬ。そんなダメ人間の僕は今非常に困ってる。なぜって？

「や、やめてくださいー！」

「別にいいじゃねえかよく悪いようにはしないぜ？」

数人のスキルアウトに囲まれている黒髪の女の子が俺の進行方向にいるからだ。

さかのぼること数時間前。今日も今日とて不幸に巻き込まれる友人に巻き込まれた僕は友人と共にスキルアウトから逃げていた。

「不幸だあー!!」

友人、上条当麻かみじょうとうまが叫ぶ

「お前に巻き込まれた僕の方が不幸だと思っただけど……」

簡単に現在の状況を説明しよう。

上条と僕は補習の帰りに絡まれている女子中学生を見つけた。

僕はめんどくさそうなことに巻き込まれそうな予感がしたので無視しようとしたら、面倒なことに正義感の塊である上条が間に入ってしまった。

それだけならまだよかったが助けた相手が悪かった。常盤台の超電磁砲。ここ学園都市に七人しかいないレベル5の第三位御坂美琴だ。

始めは上条と御坂たちの様子を見ていたが、雲行きが怪しくなりついには御坂が切れたので僕は全速力で逃亡

もちろん上条を置いて。

なんか「裏切り者——」とか聞こえたけど僕は知らない。

そうして僕は尊い犠牲と共に自分の住んでいるアパートに向かった。

舞台はここで最初に戻る

「どうしたものかな」

こいつらどいてくれないと僕の部屋に向かえないんだよな。

「あん？ てめえ何こっち見てんだあ？」

うわ。目つけられちゃったよ。女の子の方も助けてほしいって目をしてる。

「あのーすいませんけど、どいてくれませんか？　ここ僕の住んでるアパートなんですよ」  
「あん？」

「どいてくれたら僕は何もしませんし」

僕の言葉に少女は絶望したような目を向ける

「はっ！　情けないなあ。ふつうこういうのを見たら止めるもんじゃねえか？」

リーダー格のグラサンをかけた男が挑発するように言う。

それにつられてまわりの奴らも笑う。うるさいな

「いやー。最近の世の中だと見て見ぬふりが多いでしょ。その子を助けても僕に得ないし。まあその子が何か僕のためにするならまだしも」

「……なんでも……す」

少女が何か言うが聞こえなかった。

「なんでもするから助けてください！」

「ああ!!　てめえ何言ってるやがる！」

「——ほんとになんでも?」

少女は少し驚いた顔でこちらを見て、頷いた

「よし、契約成立」

僕はめんどいことは嫌いだが得があるなら話は別。

「とうわけで離してあげてくれないかな?」

「ふざけんなよ!」

一番近くにいる男が持っていた鉄パイプで僕を殴る。しかし僕は右手でそれを受け止めた

「なっ!」

「ほい、一人」

僕は驚いてる男の胸に蹴りを当てる。ミシリ、と骨のきしむ音が聞こえた。

「ついでにもう一人」

固まっていた男の顎に掌底をぶつける。

仲間が二人やられたことにビビったのかスキルアウトは一人を残して逃げ出してゆく。

残ったのはリーダーダ格の男。それに少女、僕の三人だけだった。



「う、動くな！」

男が少女の髪をつかむ

「動いたらこいつを燃やす!!」

直後男の手から赤色に輝く炎が出現した。まあそんなの気にしないんだけどね  
僕は男に近づく

「動くなって言っただろ！」

男の出した炎が少女の長い髪を焼く、ことはなかった  
なぜなら男が倒れていたからだ。

「え?」

「大丈夫?」

少女は何が起こったのかわからなかったようだが自分が助かったことに気づく。

「あ、はい。なんとか」

「まったく能力者って碌なのいないなあ」

これだから『科学』の連中は好きになれない

「そうだキミ、約束」

「っ!」

少女がビクツツと体を震わす。……仕方ないな

「まあ今日は遅いからまた今度で」

立ち尽くす少女を無視し僕は無事に部屋に向かった。

ここ学園都市は8割以上が学生が占める

そして ここでは 「超能力」と言う者が存在する

そしてその能力には 「レベル」と言う段階がある

レベル0 無能力者

レベル1 低能力者

レベル2 異能力者

レベル3 強能力者

レベル4 大能力者

レベル5 超能力者

簡単に超能力者を作る場所だ。

そんな科学の最先端の場所に僕はいる。『科学』と真反対の『魔術』を使える僕が。「なんでこんなことになったんだろうねえ」

僕はそうつぶやき、部屋の明かりを消して眠った

## 超電磁砲

ピピピという簡素な着信音で目を覚ます。眠いが携帯を取り出し、出る

『ゆうくん？ 今日学校くる間にプリン買ってきて〜』

甘い、猫なで声が聞こえてくる。

「……なんで？」

『だってゆうくん。こないだ蜜のノート借りたじゃない。だから蜜のお願いも聞いて欲しいなって』

電話の相手ははなづきみつ華月蜜

僕と同じく『魔術』側の人間だ。

「わかったよ。はあ」

着信を切って寝ぼけ眼をこすり、体を伸ばして一言

「あーめんどくさい」

「何か言いたいことはあるかな？ 桐ヶ谷くん？」

教室に入ると僕の席の前に絆創膏を貼った上条がいた。

「おー無事だったのか上条」

「何が無事だ！」

「レベル5に追いかけてそれなら十分でしょ」

まあ「幻想殺し」だっけ？ 異能を打ち消せる右手があれば余裕だったはずだし。

「上ちゃんも相変わらず不幸だにやー。まあそれに巻き込まれるキリちゃんも大概だけだな」

「上ちゃんは幸運を引き替えに女子とのフラグを立てるから不幸とっていいのかわからへんけどな」

上条と僕が話しているのをみて金髪グラサン男、土御門元春と青い髪の変態、青髪ピアス（本名不明）が近づく。

「まあ、僕が一番の不幸ってことで。あれ、蜜まだきてないの？」

「ああ、みーちゃんなら——」

「……よ。ゆうくん」

後ろにやわらかい重みを感じた。

「……重いよ、蜜」

「つれないわねえ。蜜、涙が出ちゃう」

でかい胸を押しつけてくる蜜を背中から離す。蜜は自慢だというピンクの髪をいじりながらウソ泣きをしている。

正直ウザい

「ほら約束のプリン」

「わーい。ありがと。……あれ？」

ん？　なんか問題があつたのか？

「ゆうくんこれ何？」

蜜が取り出したのは『超濃厚ミックスオレオレ!!』とラベルされた缶ジュースだ。

「ん？　おまけ。お前好きだろそれ」

プリン買ったときに近くに売ってたからついでで買ったんだが……だめだったのかな？

「……おまけって、あれ高い奴だよな？」

「1缶2000円するはずだぜい」

「さすがゆうやん、ボクたちにできないことを平然とやってのける」

「「そこに痺れる憧れるうう!!」」

デルタフォースが騒ぐ。うるさい

「ゆうくんったらマジイケメン!! お礼にチューしたげる!」

蜜が口を突き出しながらこちららに向かってくる、もちろん避ける。避けた先には机があるのももちろん激突する蜜。

「はい静かにしてくださいね〜HR始めますよー」

それと同時に入ってくるこのクラスの教師、月詠小萌。見た目は小学生だがれつきとした教師だ。

「うわー! 蜜ちゃん大丈夫ですかー!」

「ふふっ……これもゆう君の愛の形……」

上条、土御門、青髪、蜜、僕が騒ぎ、小萌先生がそれを見てあわてる。

いつもの光景だ。

授業も無事終了し、帰りの準備をしていると蜜に話しかけられた。

「ねえゆうくん。今日の放課後これ行かない？」

そういつて渡してきたのはクレープ屋のチラシだった。

「このゲコ太ストラップ、欲しいのよ。二人分」

指さされた箇所を見ると「100名様にゲコ太ストラッププレゼント！」と書かれていた。

なるほど、蜜はこのカエルほしいのか。

「用事もないし、いいよ」

「おつ二人ともデートですかい？ お熱いにや〜」

土御門がにやあにやあいいながらからかう。

おい、青髪。中指立てんな。僕と蜜はそんな関係じゃないから

「やっだあー！土御門つたら〜」

蜜は土御門のからかいに照れているようで青髪に気づいていない。……気づいていたら青髪の指折られていたろうなあ。

「うわー並んでるわね〜もらえるかしら」



チラシに書いてあった場所に来るとものすごい行列ができていた。この行列はストラップが目当てなのかそれともクレープが目当てなのかどっちだろう。

まあとりあえず僕が思ったことはひとつ――

「……めんどい」

「美人と一緒に並べるんだからいいじゃない」

「あー！ あなたは！」

並んでいると後ろの方から大きな声がした。後ろを振り返るとそこには花の髪留めを付けた女の子がいた。

「ん？ 昨日の女の子か。こんにちは」

「こ、こんにちは」

「あれ、ゆうくん知り合いく？」

「昨日絡まれていたところを少しね」

「ふーん。珍しいわね、ゆうくんが見ず知らぬの人を助けるなんて」

そんなことない。僕に得があれば見知らぬ人でも助けるさ。

「昨日は本当にありがとうございました！」

女の子が頭を下げる。それと同時に彼女の後ろにいた人物と目が合う。

「……あんたどこかで会ったような……」

「気のせいでは?」

超電磁砲、御坂だ。幸いにも彼女はこちらのことをあまり覚えてはいないようだ。

「次の方」

「あら、意外と早かったわね」

蜜と僕がクレープのトッピングを選び、カエルのストラップをもらう。

「はい、これが最後です」

直後、後ろから倒れるような音が聞こえたので振り返ってみるとそこには四つん這いになって落ち込んでいる御坂の姿があった。

「どうしたの? 彼女」

「あはは、欲しかったみたいですよこれ」

そんなに人気なのかこのカエル

「あの、御坂さん。よかったらどうぞ」

「いいの!?!」

少女がストラップを御坂に渡すと御坂は目を輝かせ立ち上がった。

「では、これで。あ、そうだと約束のことなんですが」

「ん? そうだね……しまった考えてなかった」

「それでしたら、私とアドレス交換しましょう。思いついたら連絡ください」  
お互いにアドレスを交換し、女の子は友達だと思われる子に走っていく。

「ゆうくん。約束って何？」

「何でもしてくれるんだって」

「へえー。あ、このクレープおいしい。ゆうくんのは……」

「あげないよ？」

僕が頼んだのはプリン＋シナモン＋ジャム＋生クリームたっぷりクレープ。僕は自他ともに認める甘い物好きだ。

「……いらないわ。舌の感覚なくなりそうだし」

失礼な。おいしいのに！

抗議しようとした瞬間、どこから爆発の起きる音が聞こえた。

煙が晴れるとシャッターの中からいかにも強盗ですといった格好をした三人の男が現れた。

「うっわ。強盗？ 熱い中よくやるわねー」

「どうするの？ 捕まえるの？ 僕は嫌だよ？」

「蜜だつて嫌よ。あんな奴らに術式を発動させるなんて」

この場から離れようとした瞬間、御坂の友人であろうツインテールの少女が強盗の前に向かつて行くのが見えた。

「……運が良ければ。超電磁砲というやつを見せてもらえるかもね」

僕と蜜はベンチに座り強盗と少女のやり取りを見ることにした

今日、私佐天涙子は友人の初春とその友人の白井黒子さん。そして白井さんが尊敬

してやまない御坂美琴さんと一緒にクレープを食べに来ている。

正確に言うとも最初はクレープを食べる予定ではなかったんだけど御坂さんが特典である『ゲコ太ストラップ』を欲しがっていたので食べに行くことになった。

別に私は甘いものは嫌いじゃないからいいんだけど……なんか意外だったなレベル5つて聞くとどうも嫌なイメージしかわかなかつたからね。

しかもお嬢様学校の常盤台、正直会うのが嫌だった。まあ実際会ってみるとお嬢様で雰囲気ではなく私たちちみたいな普通の人と同じ感じだ。

「うっわ結構並んでますね」

とりあえず私、御坂さんがクレープ屋さんに並んでいる。白井さんと初春がベンチを取りに行ってる。

「……めんどい」

「美人と一緒に並べるんだからいいじゃない」

前からどこかで聞いたことがあるような声が聞こえた。

そして、思い出した。

「あー！ あなたは——」

「ん？ 昨日の女の子か。こんにちは」

「あ、こんにちは」

「ゆうくん知り合いです?」

昨日助けてくれた人だ。昨日と同じでダルそうな雰囲気醸し出してゐるなあ。隣にいるのは彼女さんかな?

……デートかな?。

「昨日絡まれていたところを少しね」

「ふーん。珍しいわね。ゆうくんが見ず知らぬの人を助けるなんて」

その代り何でもいうことを聞くことになっちゃいましたけどね

「昨日は本当にありがとうございました!」

とりあえずお礼をしてなかったことを思い出し慌てながらも頭を下げた。

その私の様子を見て長い行列にイライラしていた御坂さんもこちらに気づく。そして青年を訝しげに見つめる。

「あんたどこかで会ったような……」

「気のせいでは?」

「次の方」

クレープ屋の店員さんの声を聞き、いつの間にか列がだいぶ進んでいたことに気づき、彼女さんがクレープを選び始める。そして彼女さん、昨日の人がゲコ太&クレープをもらい私の番が来た。

「はい、これが最後です」

「はい、……えっ？ 最後？」

その言葉と共に私の後ろで御坂さんがものすごく落ち込んでる。なんか「ゲコ太……ゲコ太」とつぶやいてる正直怖い。

「よかつたらあげますよ」

「いいの!？」

私の言葉を聞いて目をキラキラさせる。

「ふんふんふん♪」

御坂さんが鼻歌を歌いながらベンチに向かう。

「ふう」

「御坂さんって想像と違いますね」

「うん。お嬢様、ではないし。上から目線でもないみたい」

「なんであそこ、こんなお昼にシャッターが下りてるんでしょう？」

「これって——」

「お姉さまと佐天さんはここに！」

そういつて白井さんは爆発の起きた方向に向かう。初春の方を見てみると警備員だろうか？ どこかに連絡をしている。

「白井さんって強いんですね」

「まあね」

「いまこの広場から出ちゃダメですって！」

「子供が一人いないんです！」

「手分けして探しましょう。初春さんはあっち、私はこつちを」

「私も！……私にも手伝わせてください」

私だけ何もできないなんて……それは嫌だ！

自分に気合を入れ辺りを見回す。すると探しているだろう子供を見つけた。……強盗も一緒にだが。

御坂さんや初春に声をかけようとしたが強盗は今にも子供を連れ去ってしまうかもしれない。そう考えると私の体は強盗に向かっていた。

「何だてめっ！ 離せ!!」

「だめえ！ 連れてかせない！」

子供を抱え強盗から触れさせないようにする。強盗はしびれを切らしたようで、私の顔を蹴り用意していたであろう車に乗り込んだ。



うう、蹴られたところ痛いけど子供を守れてよかったあ……

私が安心してしていると御坂さんが私の横に立ち、右手を構えていた。

「御坂さん？」

何をする気ですか？ そうたずねようとした瞬間。彼女の右手からオレンジ色の光が見え、そしてその光は強盗の乗った車めがけてまっすぐに飛んでいった。

「……うわあ」

御坂美琴。通称“超電磁砲”。おそらく彼女はその代名詞である超電磁砲を飛ばしたのだろう。

「レベル5って、すごいなあ……」

私は誰に言うわけでもなくただ、つぶやいた。

その後、白井さんが捕まえた二人と車で逃げようとした強盗はアンチスキルに連れられていかれていった。

「大丈夫？」

気遣いの声をかけてきたのは昨日の男性だ。

「はは、なんとか。でも見てたんなら助けてくださいよ〜」

昨日みたいにパパッとやってくれたなら私も蹴られなくて済んだのに

「僕に得がないからね」

「はい、女の子の顔に傷つけるなんて最低ね」

彼女さんに水でぬれたハンカチをもらい蹴られた部分をふく

「ありがとうございます。えっと」

「華月蜜よ蜜でいいわ」

「ありがとうございます。それに……」

「そういえば名乗ってなかったね。桐ヶ谷憂鬱だよ」

「佐天涙子です」

「佐天さん。大丈夫……?」

御坂さんの声が聞こえる。

「じゃあ僕らはこれで」

「また会いましょうね」

そしていつの間にか二人はいなくなっていた。

「あ、ハンカチどうしよう」

「正直どうだった？ 超電磁砲」

佐天たちから十分離れた後蜜が僕に聞いた。

「威力はまあまあ、ただ直線的。まあ彼女全体の能力の応用性を考えればさすが第三位ってところだね。たぶん砂鉄なんかも操ることも可能だし、磁力による緊急回避もできるとはじゃない？」

「同タイプの能力との戦闘はどうなるのかしらね」

「さあ？ そこまでは興味わかないよ。僕たちがアレイスターに頼まれたのは上条当麻のプランからのズレの修正だし。常盤台については別の担当がつくでしょ」

女子たちの空間に行くのはさすがに嫌だしね

「能力開発を受けてない私たちじゃ常盤台には入れないしね」

蜜は僕の携帯を見つめて不満そうな目を向ける。いったいどうしたのだろう。

「それより、ゆうくん。ストラップつけないの？」

「めんどくさい」

うまくつけないんだもん

「まったく、ほら」

蜜は僕の携帯を奪い取り、パパッとストラップをつける。

「ん、ありがと」

「もつと感謝してもいいのよ——ん？ だれかしら」

蜜の携帯に着信が入る。

「もしもし？」

『あゝ“色欲”ですか』

間延びしたような声が携帯から漏れた。電話の相手は学園都市の“裏”の人間。名前、顔、年齢などは一切不明、僕たちは“マネジメント”って呼んでるけど

「……仕事かしら？」

蜜がすごい嫌そうな顔してる。

『いえいえ。学園長からの連絡です。“明日の朝、話があるので集合してほしい”だそうです。ほかのメンバーも近くにいたら連絡しといてくださいね』

「だって」

「……めんどくさい」

明日はせつかくの休みなのに……

## お店にて

赤い髪をした女性に案内された場所は窓のないビル。ここに来たことは何回かあるが、どうにもこの暗さには慣れが来ないようだ。

「ふむ、すまないね急に呼び出したりして」

液体の中にさかさまの状態の人物に話しかけられる。

こいつが学園都市の総括理事長。アレキスタークロウリー。僕たち“大罪”の雇い主でもある。

「つていつても集まったのは僕と蜜と椎しいだけだけど。まあテレビ電話で貴怒きどもいるけど」

「最低限”怠惰”と”憤怒”が集まればいい」

「あら？ 私は来なくてもよかったのかしら？」

蜜が少しイラついたような声でアレキスターをにらむ

「君は怠惰と同じ任務をしているからね」

「超電磁砲と幻想殺し、アイテム、一方通行に監視をつける」

「……幻想殺しとアイテムにはすでにについてるけど？」

「ああ、だから正確に言うとお超電磁砲と一方通行に監視を追加するということだ」

「なら……帰ってもいいですか……？ 私……麦野さんにシヤケ弁……買うよう頼まれてるんです……」

椎はおびえたような声でアレイスターに頼む。

「いや、君にも追加の任務を頼む」

アレイスターの言葉に彼女は「ふえ!？」と驚く。……なにもそこまでおびえる必要ないんじゃないかな

「アイテムのメンバーの強化、主に第四位の強化をお願いする。少なくともレベル5以外には負けないようになるくらいに」

「……もうだいぶ強いんですが」

そんなつぶやきをアレイスターは無視する。おい、椎泣きそうだよ？ まあ面倒だし注意はしないけど。

「僕たちは？」

「上条麻の監視を強化、また彼に近づく魔術師がいたら報告してくれ」

『んで？ 俺はどうすればいいんだ？』

いままで黙り込んでいた貴怒がいつも道理の不機嫌そうな声を上げる。

「君は一方通行の監視。また、ありえないだろうが実験にて彼が躊躇したりしないようにしてくれ」

『躊躇した場合は?』

「判断は任せるが、殺しはしないでくれ」

『わーったよ』

そうして貴怒は画面から姿を消した。電源を落としたようだ。

「それと、怠惰。君には今やってもらいたいことがある」

……めんどくさい。何で僕が……

「学園都市に攻め込もうとしている魔術師たちがいる。かなりの大人数だ。君が適任だろう? これらの撃退を頼む」

「……了解」

窓のないビルから出て、蜜と別れる。

少し歩いてから僕は上条と買物に行くことを思い出した。

まあのおんびり行っても時間には間に合うだろう。

「あれ、桐ヶ谷さん？」

「佐天さんか」

「佐天さん知り合いですか？」

「初春は知らないんだっけ。この人は桐ヶ谷憂鬱さん。私の命の恩人なんだ！ それで、桐ヶ谷さんは何でこんなところにいる？」

「ん？ ちょっと待ち合わせ」

「そうなんですか。蜜さんですか？」

「いいや、男の人だよ。噂をすれば……」

「またせたな桐ヶ谷」

数メートル先に上条がいた……小学生くらいの子供を連れて。

「……すまんが僕はロリコンと待ち合わせの約束なんてしてないんだが」

「ちよ！ 違うって！」

「はいはい。んじゃね佐天さん」

上条の叫びを無視して佐天さんと別れ、お店に入る

「はい！ それにしても御坂さん遅いなあ」

僕は上条と御坂が喧嘩しているのを見て、トイレに駆け込んだ。



なんでって？ めんどくさいじゃん。痴話喧嘩に巻き込まれたら。まあそろそろ終わったようだし出ますか。

「おっと」

トイレの入り口で眼鏡をかけた男の人にぶつかる。

男は僕に気づかなかったようだ。……なんかブツブツ言ってたし関わらない方がいいかな。

さて、上条を探がしますか。

辺りを見回すと上条がこちらに走ってくる。

「どゆこと?」

「ふう」

「いや、〃ふう〃じゃなくて上条さんや、事情を教えてはくれないかね」

「ああ実はな」

上条が言うことをまとめるとこういうことか。

さっきの眼鏡が風紀委員を狙った事件を起こしており、今回はこのお店にいた風紀委員を狙ったと。

それで、上条は爆破に巻き込まれそうになった風紀委員を助けたと。……僕がいない間にイベント起こり過ぎでは？

「まあ面倒事になる前に退散しよう」

「だな」

上条と別れ誰もいない路地裏に魔方陣を書く。

アレイスターに頼まれた任務を執行するためだ。

陣を書き終わり、僕は「呪」を唱える。僕の魔術を展開するには必要だからね。

「供物をささげよ。さもなければ怠惰の罰を」

魔方陣が光る。これで大丈夫かな。一仕事したし甘いものでも買って帰ろう。

「ステイル。聞きましたか？」

「神裂か。なんだい？」

「学園都市に攻め込もうとした魔術組織千人が意識不明だそうです」

「それで？」

「千人全員が〃同時に〃意識不明らしいのです」

「……どういことだい？」

「詳しくはわかりません。ですが、とてつもなく強い魔術師が関わっていることはたしかです」

「……関係ないね。僕はあの子を守るために全力を尽くすだけだ。そのためなら吸い切った煙草を足で踏みつぶす。」

「———どんな敵でも容赦しない」